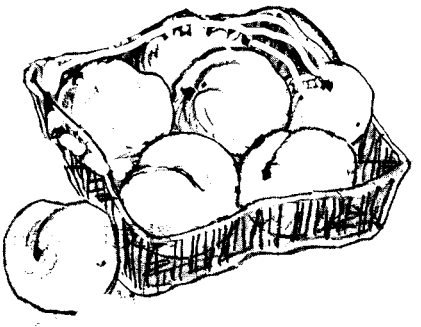
随筆集

えこひいき

関野歩男

えこひいき



著者略歴

関野歩男（本名　関　信夫）

一九二九　栃木県に生まれる

一九四九　宇都宮農林専門学校卒

以後、公務員として勤務のかたわら日曜画家として活動を続ける

一九七四　東京渋谷で油絵個展、以後、銀座・新宿等で個展開催一二回

一九八二　脱サラ、画業に専念

かたわら随筆にも力を注ぐ

一九八四　「文芸せたがや」随筆部門に入選

以後、連続数回入選

一九八六　「画文集　野州」出版

以後「海拉爾　再び」「画文集　いばらき」を出版

随筆集　えこひいき

平成三年十月十五日　初版発行

頒価　一、六〇〇円

著者　関野歩男

〒156東京都世田谷区桜丘二―九―八

電話〇三―三四二八―六七二四

制作者　早武忠良

東京・文京・小石川

制作所

東京都文京区小石川一の一三の二

振替　東京　二―一二二四七四番

電話〇三―三八一四―〇八五三

FAX〇三―三八一四―〇八五四

株式会社　暁印書館

©Nobuo Seki　1991　Printed in Japan

随筆集 えこひいき＊目次

えこひいき……5
あゝ荒れ寺……15
ハゲの進行……26
クログワイ……37
おむつの記憶……44
終戦前後のこと……52
似てるか似てないか……64
自動小銃……78
大家さん……84
雪見酒……93
記憶の空白……106
過去の解決……114
栄えある……126

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

土産は胃散 …… 132
靴なしのころ …… 138
ビワと新聞 …… 148
脱サラ絵かきの個展日記 …… 159
手造りの野球場 …… 170
布団担いで …… 178
旅の精神 …… 191
シクラメン延命作戦 …… 198
グアバのにおい …… 207
好物はタクアン …… 219
無断外泊 …… 226
あとがき …… 234

挿画・カット　著者自筆

えこひいき

動物好きの二人の孫娘が、猫の子を二匹もらってきた。

どちらもアメリカン・ショートヘアの母親から生まれたのだが、一匹は母親と同じショートヘア、もう一匹は三毛猫である。三毛のしっぽはいわゆる「切り尾」なのか、丸まった変形しっぽだ。ショートヘアのしっぽは思いきり長くて優美な曲線を描き、後足を折って前足を立てた姿勢のときは、どういうわけかいつも前足にくるりとしっぽを巻きつけている。

子猫のうちは、外観を別にすれば二匹とも全く同じ仕掛けの玩具のようにクルクル、コロコロ、同じ動きをしているように見えたが、何か月かたつうちに両者の性格的違いがしだいにはっきりしてきた。一言でいうならば、ショートヘアはお嬢様的であり、三毛のほうは野良猫的なのだ。

二匹とも雌だったから、戸外には絶対に出さないというのが我が家の猫を飼うについての大

前提だったが、三毛のほうは家人のちょっとした油断をついてしばしば逃亡した。玄関の扉の開く音がすると、サッと矢のように飛んできて、慌てる人間どもの足元をするりと抜け、アッという間に消えてしまう。

機敏さにおいては人間どもは猫、特にうちの三毛の敵ではなかった。

「それッ、あそこだッ」「こっち、こっち」

と騒ぎたて、失礼をも顧みず他人の家を塀の下から覗きこんだり、小魚をまいたり、マタタビをちらつかせたり、盛んに小細工を弄するけれども一向に捕まらず、疲れ果て、挙げ句の果ては、

「もういい、ほっとけ、ほっとけ」

ということになったころ、ようやく真っ黒になって戻ってくる、というのが常だった。ショートヘアも稀には逃げだすことがあったが、それは三毛の一〇回に対してせいぜい一回ぐらいのものだ。

三毛が、きっちり閉まった戸を開けてしまう巧みさというか、執念というか、凄まじさというか、それは見ていてゾッとするほどだ。

引き戸の場合は、先ず戸の前に身を横たえると、四本の足を全速力で走るように、一方向に

蹴り続けるのだ。そうするうちに、かなり重い引き戸も根負けして、ズズッ、ズズッと二、三ミリずつ移動を始めるのだ。

開き戸の攻略法は、引き戸ほど難しくはない。戸のほんの僅かな隙間に、前足を掻くようにしながら強引に押し込むようにする。頭のほうも頭突きというほどではないが、足に合わせてぐいぐい隙間に押しつける。玄関のドアのように、特別に重い戸もそのやりかたで全開はしないまでも、ほんの少しなら開く。そこに前足を挟まれて、ギャーギャー大騒ぎをしたことが二、三度あった。

そういう具合に、家中の大抵の戸は開けてしまう。

「猫がいないよ、じいちゃん、知らない？」

と、孫が半泣きになって探し回っていると、押入の中からミャーなどと聞こえてきたりする。戸というものは滑りをよくするために蝋を引いたりするのが当たり前だが、我が家ではまるで逆だ。戸を開ける技術を完全にマスターしてしまった猫のために、滑りをいかにして悪くするか、どうしたら突っかかって開かなくなるか、ということに苦心している。

戸の重なり目に割り箸が突っ込んであったり、戸を開けようとすると椅子がガタガタ引っかかったりする。わざとそうなるようにしてあるのだ。以前は開け放しにしていた扉もいちいちしっかり閉めなければならないから、面倒なことおびただしい。

戸を開ける猫は利口な猫だそうだから、三毛は利口で、ショートヘアは愚か、ということになりそうだが、ショートヘアの落ち着いて気品ある動作を眺めていると、愚かさよりも、つまらぬことに齷齪しない、育ちのよさみたいなものを、より強く感じてしまう。

三毛のほうがメキメキ太りだした。顔が真丸になり、尻のあたりがムクムクしてきた。ショートヘアのほうは、やや細めのすっきりした体型を維持していて、猫の細面というのも変だが、そんな感じなのである。近所の猫キチの人たちは、うちのショートヘアを見ると決まってこう言う。

「あらァ、この猫べっぴんね、美人さんだ」

どういう猫がべっぴんなのか、そんなことはこれまで考えたこともなかったが、近所をのそのそ歩いている野良猫を見つけたら、その都度必ず美醜を比較検討するように心がけているうちに、確かにうちのショートヘアが相当な美人猫であるということが実感できるようになってきた。

三毛のほうはやや太りすぎのせいもあるのだろう、かわいさではショートヘアにはとても及ばない、と私には思える。

三毛が太りだしたのは、意地汚くショートヘアの餌を横取りするからなのだ。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

二匹にそれぞれの器で餌を与えると、三毛は自分の分け前を食べ終わらないうちに、当たり前みたいな顔をしてショートヘアの器のほうに進出するのである。

そのときのショートヘアの態度が何とも理解できないのだが、三毛を追い返すわけでもなく、「それならこっちだ」とばかり三毛の器のほうに回わるわけでもなく、数歩さがって自分の餌が減っていくのをじっと眺めているだけなのだ。別に無念そうな様子も見られない。

三毛はショートヘアの分をきれいに平らげてしまうこともあり、少しは残すこともあるが、それからおもむろに自分が先程残しておいた分に取りかかる。ショートヘアは、三毛のお余りがあればそれを頂戴するが、お余りがなければそれで食事は終わりということになってしまう。というわけで、三毛はショートヘアの少なくとも倍くらいは食べているらしい。太るはずだ。

食べることに関する限り、ショートヘアの態度は何とも不可解である。食べ物で争うような、そんなはしたないことはいたしませんとでも言うつもりなのか、でないとすると、相当のオバカサンなのだろうか。ぜひとも前者のほうであって欲しいと願っている。

どういうわけか、三毛は二階、つまり孫たちのところに、ショートヘアは一階、つまり私と細君、老夫婦のところにいることが多くなった。

ショートヘアは、最初に細君にお腹をなでてもらったときの快感が忘れられないのだろう、

私たちのところに来るとすぐにゴロンと横になって、お腹をなでてくれと催促する。二度、三度くらいはいいが、あまり度重なると、足の先で少し邪険に二、三度コショコショとやって、

「今日はこれだけ、はい、さようなら」

と追い返したりした。ショートヘアはかなりの甘えん坊なのだ。

細君は前足を持って立ち上がらせ、「あんよは上手」をさせてみたが、これもすっかり気に入ったらしく、

「ねえ、あれやって、やってよ」

というふうに、しきりに催促するようになった。

湯上がりの体から発散する石けんの香りも好きらしく、風呂からあがってくると、足にうるさくまつわりつく。気味が悪くなるほどのしつこさなのだ。

三毛のほうはというと、時に私たちの所にやって来たとしても、野良猫みたいに私たちを横目でうかがうという様子が見られ、ちょっと手を動かそうものならパッと逃げようとする。私たちに甘えるということは全然ないが、二階では結構甘えているという話だ。

恋の季節が来たせいか、三毛が喉の奥のほうから、ハスキーでイヤーな声を出すようになった。ショートヘアのほうは発育が遅れていて、そのほうは未成熟なのかどうか、そういうこと

はない。三毛のあまりのうるささにかんしゃくを起こして、普段はそういうことをしない私なのだが、

「うるさい！」と怒鳴りつけたり、新聞紙を投げつけたりした。

そのころ、滅多に下に降りてくることのなかった、たとい降りてきたとしても絶えず逃げの態勢をとっていた三毛が、大きな顔をして平然と私たちのところにやってくるようになった。それと同時に、ショートヘアの態度が急変した。三毛がそばにいると、私にも細君にもとんと甘えようとしないのだ。まるで別の猫みたいだ。部屋の隅のほうに低い姿勢でじっとしていて、呼んでも来ないし、細君が「あんよは上手」をさせようと前足をとっても、以前のように喜んでそれに応ずることもなく、腰をひいたり、身をよじったりして、

「何だか今はしたくないの、気が乗らないの」

という態度を示すのだ。

私たちの前に来ると、すぐにゴロンと横になってお腹をなでてくれと催促したのに、三毛がいるところではそれさえもしないのである。

卑屈というか、遠慮深いというか、弱虫というか、そういうショートヘアを見ていると、

「そんなとこで、いじけてないでこっちへいらっしゃい。本当にお前はいじけ虫なんだから、

嫌ねえ」

細君もついそんなことを言ってしまう。

きっちり分かれていたわけではないけれども、一階はいわばショートヘアの縄張りみたいなものだった。その縄張りを三毛が侵したのだから、普通なら熾烈な縄張り争いが起こるはずだ。それなのに、平和主義者ショートヘアは「争いを好まず」とばかり、自分の縄張りをさっさと明け渡してしまったのだ。

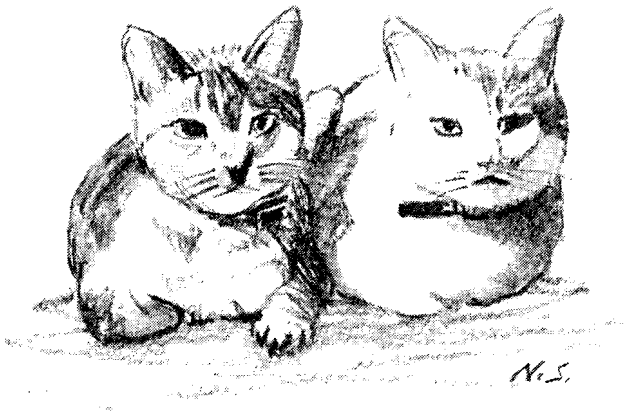
肥満体をもてあますようにノソノソと、嫌な喉声を出しながら他人の縄張りを我がもの顔に歩き回り、絶えず人の出方をうかがうような目付きの三毛に比べると、隅のほうで小さくなって、せいぜい東洋蘭の長い葉をそっと噛んでみたり、テーブルの脚にこっそり甘えてみたり、高いところにまるで置物のように優雅な姿勢でいつまでもじっとしているショートヘアのほうがずっとずっとかわいい、たといオバカサンだったとしても、と思ってしまう。

「ララ（三毛）のほうがかわいいでしょ」

「アップル（ショートヘア）のほうがかわいいでしょ」

二人の孫が代わる代わる聞くから、

「どっちもかわいいよ、おんなじだ」



などと言ってはいるが、実はうんと違うのだ。三毛の所有者のほうに知れるとまずいのであまり書かないことにするが、正直のところかなりえこひいきをしている。

玄関の飾り棚に金魚鉢が置いてある。

鉢のガラス越しに、猫が前足の先で金魚にちょっかいを出している光景はよく見るが、うちの猫はどういう魂胆なのか、金魚鉢の上にすっぽりかぶさるようにして悠然と瞑想している。鉢には蓋がしてあるから金魚に実害はないものの、金魚にとって猫は天敵みたいなもの、さぞかし金魚は寿命が縮む思いをしていることだろう。

ところで、この金魚鉢上の瞑想は、ショートヘアも三毛もどちらもやる。この点は両者の間に少しも違いがないのである。三毛だけがやって、ショートヘアがやらないなら、

「こらッ、ずうずうしくそんなとこで」

とか何とか言って三毛を追い払ってしまうところだが、お気に入りのほうもやっているのではそうもいかないのである。

（一九九一・四）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com